市議会行政視察

海外に学ぶ

市と大学の連携の在り方や、半導体企業に適したインフラ整備、投資を呼び込む施策等、本市が目標とする姿やビジョンを明確にし、実現するための戦略や手段への理解を深めるため、マレーシアの大学、「東洋のシリコンバレー」と名高いペナン州の視察を行いました。

視察報告書はコチラから

『令和６年度海外都市行政視察報告』

参加者　片山貴志　鈴木英士　大下博隆
日　程　令和６年11月18日～11月22日
視察先　マレーシア（セランゴール州、ペラ州、ペナン州）

■サンウェイ教育グループ

視察事項：サンウェイ大学の取組みと大学が核になったまちづくりについて

サンウェイ大学は、マレーシアを代表する企業のサンウェイグループにより開発された、サンウェイシティの中に位置しています。

サンウェイシティは、もともと錫（すず）鉱採掘が行われていた空き鉱山の土地から開発が始まり、教育に重点を置いた持続可能な開発を意識しながら開発を進めています。

サンウェイ大学では、現在、2050年までに炭素排出量をゼロにすることを目標に掲げ、多くのデジタル変革プロジェクトを立ち上げています。また、住民が生活しやすい※スマートシティをどう作るかという研究を行っており、様々な社会課題への対応について、企業だけでなく政府関係の政策に対して提案を行っています。

サンウェイシティの成り立ちを伺い、当時描いたまちづくりを着々と進めてきた結果が表れているのだと感じました。市制施行50周年を迎えた本市が、次の50年に向けてどのような姿を目指し、何に投資してまちの価値を向上させていくのか、選択と集中の考えのもと、取捨選択しながら考える必要があると感じました。

サンウェイ大学

UTAR

■トゥンク・アブドゥル・ラーマン大学（UTAR）

視察事項：UTARの成り立ちと大学を起点としたまちづくりについて

UTARの位置するカンパーは、かつて錫鉱山として栄えていましたが、加工材料の変化に伴い1985年に鉱山が廃止となり、大規模な失業、人口流出、経済問題が発生しました。そこで、ペナンとクアラルンプールの中間に位置するカンパーの地域特性を生かし、重点を錫から教育に移すことで改革することが決定され、2007年に中華系マレー人にも通いやすい大学として、UTARが設立されました。

その立地ゆえに若い世代の都市流出も問題になっていたそうですが、大学の設立による若者の呼び込みとそれに伴う食料品店や飲食店の出店等の成功事例が学べました。大学では地域特産のショウガやメロンの栽培にIoT※を導入し生産性を高めたり、学生の協力によるネット販売等

※スマートシティ　最先端技術の活用により、都市や地域の機能やサービスを効率化・高度化し、生活の利便性や快適性を向上させるとともに、人々が安心・安全に暮らせるまち。
ＩｏＴ　internet of thingsの略。機械・家電などのモノをインターネットにつなげる仕組み。遠隔で操作したり、モノ同士の通信が可能になる。

も行っており、地域との結びつきも強く感じました。また国内で卒業生の就職実績トップ3の大学として高い評価を受けており、毎年2回の就職フェアなど、就職支援にも力を入れる他、学生向けのスタートアップ支援も行っており、地域活性化を促しています。近隣にはUTAR病院、インターナショナルスクールも運営しており、大学の存在はまちにとって大きなインパクトがあると感じる一方、本市でも大学があることによる意義をどのように捉えていくかが重要であると感じました。

■ペナン島市議会（MBPP）

視察事項：ペナン島でのDX化、スマートシティ化についての取組みについて

ペナン市はISO37122（スマートシティの指標）を取得し、スマートシティの導入を進めています。2023年8月末に導入後、現在は第1段階にあり、2025年2月に第2段階に到達することを目標としています。マレーシアにおけるスマートシティは7つの要素で構成されており、その実現に向けアプリの開発も行われています。例えば「スマートモビリティ」の分野では、アプリ上で駐車場の検索や電子決済が可能になっているほか、Link Bikeというシェアサイクル事業なども行われています。また、日常的に発生する深刻な渋滞の対策として、交通分析を行い違法駐車等を警察へ通知するスマートアラートなども実装されています。これらの取組みでは具体的なビジョンとそれに基づくミッションを明示し、市民の利便性や生活の質の向上を目指すとのことでした。

■ペナン州政府

視察事項：ペナン州での半導体企業誘致に至る経緯、インフラ整備に関する取組みについて

ペナン州選出の国会議員であり、ペナン州第2副首席大臣でもあるジャグディープ氏と意見交換を行いました。

ペナン島における半導体生産量は世界の6.5％を占めており、研究開発に重点を置いています。人材の確保と育成においては、特に若者に向けた手頃な住宅の提供が重要視されているとのことです。インフラと産業の拡大については、工業地帯は自由工業地帯、自由貿易地域として多くの優位な点がある一方、ペナン島のスペース不足から、本土のバトゥ・カワン等の新しい工業地帯の拡大が進行中とのことです。環境への配慮としては、洋上太陽光発電所のプロジェクトが計画されているほか、建物を建てる際には環境に配慮したものとするよう求めるといったことが行われています。

ジャグディープ氏（右から6人目）と

■全体を通じての所感

マレーシアは総人口の53％が29歳以下と若年層が多い人口構造で、2024年に3431万人、2050年には4346万人に達すると予測される国です。今回の視察では、前述の他にサンウェイ病院、不動産グループ、UTAR病院、ウエストレイク・インターナショナルスクール、INVEST Penang、FREPENCAを訪れ、様々な視点からお話を伺いました。どの視察先でもSDGsが大きく取り上げられ、持続可能な発展への取組みが展開されていました。

大学を核としたまちづくりや、半導体を中心としたまちづくりといった点での国際交流を含め、地域発展に向けた戦略の重要性等、大変参考となる視察となりました。

最後に、UTARと広島大学との大学間協定にもご尽力され、我々のマレーシア訪問においてもご助言、ご協力を頂いたマレーシア元留日学生協会（JAGAM）のゲイリー・タン代表に感謝いたします。